

第21回MF文庫Jライトノベル新人賞 最終審査会レポート

暑さの増してきた夏のある日。

第20回MF文庫Jライトノベル新人賞にて最優秀賞を受賞しました茶辛子は、都内某所にて開催される最終審査会にお招き頂きました。今回は、第21回MF文庫Jライトノベル新人賞の最終審査会の当日の様子をレポートします。

審査会は広く風通しの良い会議室で行われました。

編集部の数人が教室で授業を受ける生徒のように席に座り、会議室前方では鈴木大輔先生と志瑞祐先生が現地参加。鈴木先生は『ご愁傷さま二ノ宮くん』『お兄ちゃんだけど愛さえあれば関係ないよねっ』などの人気作を多数手掛けておられます。志瑞先生は『精霊使いの剣舞』『聖剣学院の魔剣使い』などで多くのファンを持つ人気作家。さらに備え付けの吊り下げスクリーンの向こう側では『可愛ければ変態でも好きになってくれますか?』で著名な花間燈先生がオンライン参加と、錚々たる顔ぶれ。第一線で活躍を続ける作家陣ならではの、精緻で充実した審査が執り行われることとなりました。

“最優秀で間違いない” 満場一致の『ヒトメボレ・オーバーフロー』

今回候補作として選ばれたのは『ヒトメボレ・オーバーフロー』『墮天炎上』『魔女と毒殺文芸部』の三作品。初めに、『ヒトメボレ・オーバーフロー』に注目が集まりました。

「最優秀で間違いないと思います」

審査が始まって間もなく、そう切り出したのは鈴木大輔先生。「いままでの最優秀賞より完成度が高い。会話のテンポが良く、作品として押していけると思います。最優秀賞、プラスαぐらいあるといいなあ……と思う」と称賛しました。

『ヒトメボレ・オーバーフロー』は学園を舞台にした迷宮攻略の物語であり、「AI」「ホログラム」といった現代要素を上手く機能させた快作です。審査途中には『バカとテストと召喚獣』といった名作ライトノベルを彷彿とさせると話題に。軽快で優れた読み心地は、先生方の間で大いに盛り上がりを見せております。

「主人公の友人と先輩女子との関係が『バカテス』っぽいですよね。ただそれ言いだすと他の作品にもそれぞれ関係性があるので（真似と言いたいわけではない）……。とにかく、三作品の中では一番完成度高いです」と、花間先生からも高評価。

クオリティの高さに対する共通認識が生まれる一方、

「設定は（リアリティラインが）緩いですけどね。

ただ、バカテスは設定の緩さを認識したうえで、コメディをメインだと提示する話になっていたんです。『ヒトメボレ』は最後シリアスよりになっているのが気になります。作者がシリアスにいかないように気を付けているのが『バカテス』なので、そこを真似してほしい。改稿では直るだろうな、という感じもしますが」

と、緻密な部分での指摘も挙がり、作品に対する高いレベルでの期待が感じられる対話が繰り広げられました。『ヒトメボレ・オーバーフロー』の担当編集と今後の改稿について方向性を話し合う一幕も。

ところで、選考に際しては、各先生方と編集者がそれぞれ作品に対して事前評価を行う審査シートを作成し、評価の一助にするのですが、なんと『ヒトメボレ・オーバーフロー』は審査員の先生方が満場一致で「1位」の評価をつけました。

これは極めて異例の出来事だそうです。先生方の落ち着いた雰囲気と高いレベルでの期待は、稀有な満場一致のためでした。

“殺傷能力のあるセリフを” ダークな価値観を突き進む『墮天炎上』

続けて議題に挙がったのは『墮天炎上』。上記の『ヒトメボレ』が王道ライトノベルの要素を持つのならば、こちらは相反する道を選んだ作品でしょう。

『墮天炎上』は底知れぬ高校生の娘を主人公とした、サスペンス要素を持つ物語です。過去にいじめの加害者であった県議会議員の父が怨恨で殺されるも、主人公はその殺害を記者会見で肯定するという、一筋縄ではいかない幕開け。父親殺害の事件に関わる人間が次々に現れ事件の全容が見え始める構成と、化け物じみた主人公は、読む人を選びますが確かな魅力を備えています。

この作品に対し担当編集曰く、「殺傷能力のあるセリフ」を入れる方向でさらに磨き上げているとのこと。編集部の評価は高いものの、先生方の間では意見が割れる結果となりました。

「物語としては面白いよなあ、と」

花間先生は全体的な完成度をそう評価しました。志瑞先生は「途中に出てくるYouTuberが面白い」との評。この作品の中盤には男性YouTuberが出てくるのですが、その描写と一人称の語りが痛快さと最悪さを兼ね備えており、ブラックジョークを楽しめる読者なら思わず笑ってしまうこと請け合いです。

「冒頭はいい。しかし厳しい部分もある」

先生方の間では一つの共通認識がありました。それは「読みにくい」箇所があること。新人賞において文章の技術的な問題は無視できないファクターでしょう。

本作は、やや難易度の高い構成である多人数による一人称切り替えがあります。これに対する指摘や、文章の精度について言及する場面が幾度か発生。ダークな世界観を成立させるには生半な描写では読者の満足を得られにくいものだと思います。担当編集と先生方の間では、より作品をブラッシュアップするように方向性が定まりました。

新人賞を受賞した作者は、作品が読者の手元に届くまで長い期間をかけて何度も書き直しを進めていくもの。本作がどのような完成を迎えるのか、個人的にも期待が高まります。

“みずみずしい表現がある” 進る若さの『魔女と毒殺文芸部』

最後に注目されたのは『魔女と毒殺文芸部』。

内容としては、主人公は不死であるヒロインに自身の殺害を依頼され、彼女の自殺を手伝うというものです。歪な関係の中で徐々に二人は距離を近づけるも、将来的に破綻の気配がする……という他二作品と比べて青春色が強い作品です。日常の中でありながら天使や悪魔、魔術といった用語が出る世界観は、先生方の中で意見が割れました。

「これが書きたいんだ！と。瑞々しさがね」

志瑞先生はそう肯定的にとらえ、重ねて担当編集も「はい。（私が）なぜ担当したいって、この作品にはみずみずしい表現があるので」と賞しました。

作品から進る勢い、登場人物の若さや空気感の巧妙さはこの作品ならではのウリだろうと、前二作とは違った方向性での評価。「キャラクターや文章がしっかりしている」といった意見も先生方の中で流れました。

しかし強い情熱を感じられる作品は、一転した評価も受けます。

「欲張りすぎて、行き当たりばったりかな、と。無駄が多いなと」

先生方の間で頷かれたのは、この作品は「勢い」で書かれたのではないか、ということ。

熱意を詰め込んだ作品は設定も詰め込まれてしまうのは世の常なのか、先生方からは、説明の補足や登場人物の整理の必要があり、読者を意識して読みやすくするべきである、と冷静な視点から意見が列挙されることになりました。

前述の『墮天炎上』と比較する形でも検討が進められ、賞の決定に対してはそれぞれの独自性と改善点が議論の焦点に。結果的に、それぞれの作品を推す先生がいらっしまったことで、『墮天炎上』『魔女と毒殺文芸部』は両者とも佳作として選ばれました。

受賞と今後の審査について

一通り話し合い、お開きかと思われた会に一石が投じられました。

「一ついいですか。『ヒトメボレ・オーバーフロー』が審査員満場一致での一位なのに、大賞ではないのはなぜだ？という疑問が出るのではないのでしょうか」

切り込んだのは編集の一人。「確かに……」と、編集者、審査員の間にも思わず唸り声上がる。そんな中、鈴木大輔先生が苦笑を滲ませながら、首を捻りました。

「惜しいですが……これは『まだ上げるべきクオリティがある』という話ですから、大賞ではなく、最優秀賞じゃないですかね。ただし、最優秀賞と大賞の間ってないのかなあ、とつい考えてしまいます。『たんもし』より評価良くてもいいと思ってるので」

その後も議論を重ねる中、編集部からの打診もあり、『ヒトメボレ・オーバーフロー』は最優秀賞＋鈴木大輔賞を得ることとなりました。惜しくも大賞とはならなかった本作ですが、編集部としては「大賞の風格を持って現れる作品があれば！」と今後に期待を寄せる姿勢を見せました。

「最優秀賞は『ヒトメボレ・オーバーフロー』。『墮天炎上』と、『魔女と毒殺文芸部』がそれぞれ佳作ということで、よろしいでしょうか」

最後には穏やかな拍手を以って、この最終審査会は締めくくられることとなりました。

審査の結果選ばれた三作品はどれも個性的。ダークな魅力の『墮天炎上』、淡さと激しさの『魔女と毒殺文芸部』、そして王道かつ新奇の『ヒトメボレ・オーバーフロー』。MF文庫Jらしい意欲的でバリエーション豊かな作品がここに並ぶことになりました。

今後現れうる大賞への期待高まるMF文庫Jライトノベル新人賞。現在、第22回は2025年9月30日まで応募を受け付けております。

また、第21回の受賞作3作品は今秋発売予定とのこと。筆者も作品たちのことを陰ながら応援させていただきます。

改めて、受賞者の皆さん、本当におめでとうございます。

茶辛子